

国際ビジネスコミュニケーション学会（JBCA）第120回関東支部会を、9月23日（土）に、対面及びオンラインの両方で実施致します。参加費はいずれも無料です。

第1部（2:30～4:30 予定）では、業務提携や企業の不祥事という興味深い話題について、実務経験と理論の両面からお話しいたします。

また第2部（4:50～6:00 予定）では、研究手法に関して、東京大学でも長く教鞭をとっていらっしゃいました、片山晶子先生をゲストスピーカーとしてお招きし、インタビューを始めとする、質的研究法の理論的背景と実践的な課題についてお話しいたします。

ご興味がありましたら、以下のサイトよりお申し込みください。対面でもZOOMでも大歓迎です。（申込後、詳細をお送り致します。）

関東支部長 東洋大学 藤尾美佐

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeTpF5iaRVtgKOx5N3E5bDWgeoHMWlx0g-hJp8oKYGe_H70uQ/viewform?usp=sf_link

2023年9月 第120回関東支部研究会報告：研究テーマと発表内容

日程： 2023年9月23日（土） 午後2時半開始 午後6時終了（予定）

会場： 東洋大学白山キャンパス 6号館2階 第3会議室（オンラインも併用）

<第1部>（発表者 敬称略）

午後2:30～3:20 発表1（研究発表）

発表者： 東京センチュリー株式会社 上席参与 本田 健

題目： なぜ東京センチュリー(株)は、超優良企業であるNTTとの関係をこれ程までに深化させる事が出来たのか—「企業としての成長の軌跡」並びに「ビジネスコミュニケーションの果たした役割」の両面からの考察—

要旨： 2009年に東京リースとセンチュリー・リーシング・システムが合併して誕生した東京センチュリー(株)は、当時の経常利益が200億円程の中堅企業であった。それから11年後の2020年にNTTグループの主要金融子会社であるNTTファイナンス(株)のリース事業分野の経営を任せて頂くことになり、NTTと東京センチュリーを親会社とするNTT-TCリースを設立。また同時にNTTとの資本業務提携を行い、NTTは当社株式を700億円取得し株主比率10%で第3位の大株主となりました。その後も両社の協業は深化しており、インドでのデータセンター事業運営等も行っております。

中堅企業であった東京センチュリーがどの様にして、日本を代表する企業であるNTTとの関係をこれ程までに深めることが出来たのか、その軌跡を振り返る事としたい。

ポイントの一つ目は、どの様にして東京センチュリーがNTTから見て魅力的な企業へと成長することが出来たのかその軌跡を探ると共に、二点目として両社間で役員ベースでの

ビジネス・コミュニケーションがどの様に行われ、それがどの様な効果を発揮したのか、実例を交えてご説明することといたしたい。ビジネスの現場でどの様な会話が行われているのか、ご理解頂ける場になればと考えております。

午後 3:30 ~4:30 発表 2 (研究発表)

発表者： 関西学院大学商学研究科 特任教授 久島幸雄

題目： 欺罔のコミュニケーション—企業不祥事とビジネスコミュニケーション—

要旨： 企業活動のグローバル化に伴い、国内外でのトラブルの増加が顕著である。それらの一端は東証の適時開示または新聞報道によって窺い知ることができるものの、すべてが網羅されているわけではない。そこには、第三者が乗り越えることができない機密保持の壁が立ちほだかっている。企業にとって、これらトラブルは恥そのものであり、外部に知られたくない事実、隠したい事実である。中でも、企業不祥事については、社内でも一部の関係者しか知りえない極秘事項となっている。

それゆえに、これらの企業不祥事の詳細と反省事項が社内で共有されることはない。当然のこととして、他の企業がそれら企業不祥事の発生を知ることもない。たとえ海外の企業不祥事によって我が国の富が失われていたとしても、その教訓を活かして我が国企業における同種の損害発生を未然に防ぐことができないのである。

一方、企業不祥事のツールとなる欺罔のコミュニケーションについては、国内外での研究が認められるものの、事例の説明が乏しく企業経営への応用の面で難がある。また、ビジネス詐欺をはじめとする企業不祥事の未然防止策を提示するものではない。これには、前述の「外部に知られたくない」という企業側の論理も背景にあらうが、何よりも「企業不祥事の全体像を知る専門家がない」ことが原因であると考えられる。

報告者は個人的に知りえた数多くの企業不祥事に精通しており、また自らがその解決に当たってきた。本報告では、報告者のリスク管理、法務、企業経営に関する知識と経験を踏まえ、欺罔のコミュニケーションという観点から企業不祥事の実例を解説したうえで類型別に整理・分析し、それらの特徴と未然防止策を提示する。

<第 2 部> (発表者 敬称略)

午後 4:50 ~6:00 ゲストスピーカー

発表者： 片山晶子 東京大学/早稲田大学早稲田大学大学院 非常勤講師

題目： ESP の質的研究—背景・方法・活用

要旨： 言語習得・言語使用は複雑系の社会事象である。故に、その研究方法は、「何を知りたいか」「結果をどのように実践に生かしたいか」により、多種多様になってきている。特にビジネス英語も含めた English for Specific Purposes (ESP) では、「いつどこで誰がなんの目的でどのように言葉を学び、使っているのか」という状況依存性を、十分に描写・分析することが研究において不可欠である。

一般的な第二言語習得 (SLA) の研究においても、かつては認知科学や心理学の方法に準拠した量的手法が中心だったのが、近年では「社会派」に転じた (Block, 2003) とされている。

最近では、言語習得の当事者の内面や、習得が起こる（あるいは起こらない）直接・間接の状況・環境・来歴・政治的力関係等に目を向けた、学際的研究への支持が定着し、同時に、一般化が目的である量的研究とは目的・方法・思想が異なるエスノグラフィー・談話分析等の質的研究が盛んに行われるようになってきている。

この講演では主としてビジネス英語の教育と研究に携わる方々を対象に、ESP の質的研究について実際の研究を例に具体的に論じる。また近年注目されている量的・質的両方のアプローチを用いた、混合手法の研究にも言及する。

<会員出版物> (敬称略)



著者 黒田良

書名 『外資系の言語学 コード・スイッチングー英語力よりも必要なコミュニケーション能力』

出版社 日本橋出版 (2023年8月)



著者 藤尾美佐 (第17章 「国際コミュニケーションにおけるプレゼンテーション能力」執筆)

編者 竹下裕子・荒川洋平

書名 『国際コミュニケーションマネジメント入門』

出版社 アスク出版 (2022年4月)

編集・発行 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20
東洋大学 経営学部 藤尾美佐 研究室内
国際ビジネスコミュニケーション学会関東支部長 藤尾美佐
TEL 03-3945-7295 (直通) FAX 03-3945-7477 (教務課)
電子メール: misa.fujio@gmail.com / misa_f@toyo.jp